

## 新しい生活に向かつて

——ある子どもの卒業と入学——

津守 真

幼児期から九年間、私の養護学校で過ごしたMくんは今年の三月に小学部を卒業した。

幼児の時には、学校の門の中に入りたがらず、母親と道路を歩いたり、電車に乗りにくい日が多かった。幼児期はどの子も自分自身もどうしてよいか分からない混沌の時期があって、親子ともにその時期を通り抜けるのは大変である。その子も幼稚部を過ぎて小学部になり、学校の中で、大人たちや子どもたちの中で生活するのを楽しむようになった。

六年生になったばかりの四月のある日、久しく私のところに寄ってくることがなかったMくんが、めずらしく私の手をひいて、いつもは子どもはいかないことになっている地下室の部屋にいった。電灯を消して薄暗くした部屋で、そこにあった木馬に乗ってしばらく

私と静かに落ちついた時を過ごした。何と快い静けさだ。こういう薄暗い静かな世界を校長先生に教えてあげたかったんだと、私に語りかけているように思えた。

そうしながらMくんはテレビのコマーシャルを口の中で繰り返した。「千代田ビジネス専門学校は、一段と進んだスペシャリストを育てます」という一節である。Mくんは人の顔をみて会話をすることはないが、コマーシャルの文章を一本調子で言う。しばしばつき合ううちに、口真似のように聞こえるコマーシャルのことばに託して自分の気持ちや要求を伝えようとしているのではないかと、次第に私共に分かってきた。Mくんがいま、「スペシャリストを育てます」というせりふを繰り返すのは、もはやこの学校のような基礎教育ではあきたらず、スペシャリストを育てる学校にゆきたいと表明しているのかもしれないと思った。

この日、教室にもどってきた時も、この子の大好きな汽車や電車の絵本をはさみで細かく切り刻んで、屑籠に捨てた。いままで自分が好きだった物をもういらぬ、だからこうやって切り刻む、ぼくはもつと違う新しい生き方をしたいんだと告げているように私には思えた。この日の朝、私のところにわざわざ近寄ってきて、これだけのことをしたのは、六年生のはじめにあたって、校長先生に知っておいてほしいと思ったのだろう。

その頃からしばらくの間、Mくんは学校に来たがらない日がつづいた。母親の外出着の洋服をはさみで切り刻む日もあった。Mくんはもうこの学校は卒業したつもりなのかと考えたりもした。Mくんが学校の中で挑戦することを何か用意することはできないかと、担

任、職員たちはいろいろに工夫した。教室の中にテントを張ったり、テレビやカセットデッキを備えたり、庭に丸太橋を作ったりした。そのせいもあって、夏になるころには、再び元氣よく学校にくるようになった。

二学期になって、Mくんはラジオや録音テープの歌を聴いていて、自分の気に入った箇所を録音して自分のテープを作った。そして更に気に入った部分を何度も繰り返し聞いた。その部分を上手に選り出す操作の手際よさは感嘆するほどである。その中の一節は次のようである。「だけどちょっと だけどちょっと ぼくだって こわいんだ。お化けなんてないさ お化けなんてうそだ。」丁度、どこの中学校にきめるかと、母親と担任とが始終話し合い、教育委員会にいたり、学校参観にいたりしている時だった。新しい場所に行くたびに、自分が評価される会話を聞くのだから、こんな気分だったのだろう。それを私共に知ってほしかったのだろう。

三学期になり、四月から通う中学校もきまり、卒業式も近づいた頃、Mくんはそのことをよく知っていて、帰りの時間になってもなかなか帰ろうとせず、夕方まで学校にいる日が何日もあった。そういう時に繰り返し聞いていたのは、「明るい未来を開く、しかし」というコマージュナルの一節である。この「しかし」というところで正確にテープを止める。これから大人になってゆくこの子の未来が明るい未来であるようにと私共は心から願

うし、だれよりもこの子がそれを願っているだろう。「しかし」そうなりうるだろうか、どうしたらそうなるかと、立ち止まって問い、帯をしめ直して立ち向かわねばならないのが現実である。

そして更に何日か後のカセットの一節「遠い空から さびしいときはこのうたを」という箇所を、教室の窓辺のラジエーターの上で何度も繰り返し聞いていたと担任が教えてくれた。

卒業式の当日、今年の卒業生は三人だったが、卒業証書授与の時も、Mくんは壇の下のカセットデッキを操作していて顔も上げなかった。

Mくんは家の近くの中学校の心障学級に通うことになった。四月のはじめ、中学の入学式が終わるとすぐに母親が電話をしてきた。張り切って入学式にゆき、新しい教科書をもらって、意気揚々と帰ってきたという。

この子が六年生になった時、私の手をひいて地下室にゆき、TVのコマーシャルの一節を口ずさんでいたのは、校長に是非伝えておきたいという意見表明だったことが再確認される。これまで九年間も過ごしてきた学校の生活は心地良いものだったろう。けれども人は関係の中に埋没したら大変だ。温かい人間関係があるとところほど、尚更そうだ。この子はとくにこのことに敏感である。自分自身の独自性を高く揚げて譲らない、その自尊心が人々の中で生きにくくもしているし、また安易に生きようとする大人たちに、個人の尊厳を自覚するようにと語りかけている。

卒業式が終わると息つく間もなく、新しい子どもの入学式を迎える。卒業した子どもへの心の温もりを残しつつ、私共は新しい子どもたちとの生活を作ることへと気持ちを向け直してゆかねばならない。

私の養護学校の壁には、子どもたちが書いた字や線書きが一杯である。その中かなりの部分がMくんによって書かれた字である。壁に落書きがあるとほっとすると見学の方から言われることもある。私共はそれほど子どもが学校の生活を自分のものとしてくれたことに誇りを感じているが、それを奨励するわけではない。

今年、入学式の前に、職員たちがその壁を塗りかえた。卒業していった子どもたちの活動の跡が消えるのには、一抹の寂しさがある。しかし、新しい子どもたちとの間には、これからどう展開するか分からない新しい関係が待っている。どんなに経験の長いベテランの先生も、これから成長していく子どもの生活については、何も経験していない。壁を塗りかえたのは、職員たちが新学年に向かって新しい生活を形成してゆこうとする決意のあらわれであると私は思った。

(愛育養護学校)